

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 8 月 2 日現在

機関番号：35308

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26381241

研究課題名(和文) 幼児造形教育の環境設計と指導法の確立

研究課題名(英文) Environmental design and Infant education through Ecological art

研究代表者

前嶋 英輝 (MAESHIMA, HIDEKI)

吉備国際大学・アニメーション文化学部・准教授

研究者番号：50291878

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、幼児造形教育を構成する「もの」「こと」「ひと」について、環境設計と教育方法を生態造形教育学として確立することである。

環境を通して、「幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにする」ために、「場の保育」という具体的な環境設定と保育者の視座の養成の方法を実践し記録を行った。芸術士による場の設定によって、保育者の設定的な遊びと子供主体の自由な遊びの違いを明確にし、2つが相反するものでなく「型と形」として補完する機能を持つ保育であることを理論的に示した。そのための具体的な素材・道具・空間、記録・展示・対話、観察・予想・研修の教育方法についてモデルを提示できた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to establish an environmental design and an education method, as constitute ecological art pedagogy for infants, about "object" "subject" "person".

We practiced and documented a concrete method of an environmental design, and the training system of the point of view for teachers, called "Childcare through Topos", for "aiming to carry out developmental tasks while responding to the individual characteristics of each child" through environment. By the Topos by Atelierista, We made a difference of the setting play by the teacher and the child-based free play clear, and showed theoretically the function to supplement as "a model and form" not the play disagreed with each other. So we were able to show a concrete model for the education method about "material, tool, space", "record, documentation, conversation", "observation, prospect, and study.

研究分野：幼児造形教育

キーワード：生態教育学 場の保育 粘土場 環境による教育

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究は、平成29年3月31日告示の新幼稚園教育要領が中教審で検討されている時期と並行して行われた研究であった。平成18年12月15日に教育基本法が改正され、「良好な環境の整備その他適当な方法」による保育の必要性が示されたことを受けて、「環境を通しての教育」の重要性が検討されていた。しかし、教師主導による一斉教育では物事に関する興味関心が深まらないため、子供主体の対話的な学びが重視されてきていた。

(2) 直前の3年間の研究結果から、保育者や保護者の考えとしては、保育現場での粘土遊びは重要な遊びであると認識されていることが明らかになっていった。しかし、実際には現場での実践が少なく、特に土の粘土の使用は極めて少ないことも事実であった。そこで粘土遊びの教育法に限定して調査するだけでなく、保育環境全体を考慮することが重要となってきた。平成19年度からは高梁中央保育園に粘土場を設置して、約300kgの粘土で実践を行ってきた経緯があり、この調査結果に加えて「もの」「こと」「ひと」の調査と環境構成の提案が課題となっていた。

2. 研究の目的

幼児造形教育を構成する「もの」「こと」「ひと」について、環境設計と教育方法を生態造形教育学として確立することを目的とする。造形教育の目的の一つを「学ぶ意欲」の基礎を作る学びとして位置づけ、0～6歳の子供達が興味を持って外界に接するための造形遊びのシステムとプログラムのモデルを構成する。大量の粘土を使用して一年中遊ぶ事の出来る「粘土場」(図1)の運営に関する3年間の科研費による研究をもとに、レッジョ・エミリアの造形遊びの検討を通して、子どもたちに主体的な思考力が育つための造形教育を「環境」から与えられる「遊び」として提供する。

3. 研究の方法

(1) 高梁中央保育園で「芸術士」の委嘱を得て、レッジョ・エミリア・アプローチを参考にしながら、具体的に保育環境から生まれる造形遊びの実践と調査を行った。また小学校、盲学校、学童保育などでの比較実践を行うことができた。

(2) 先行研究や自由な遊びを行っている園の視察を行い、生態教育学として環境が与える意味と価値による遊びの始まる状況の調査を行った。

(3) 質問紙や「ノート」による保育者の意識調査を行い、継続的な研修を行いながら、子供主体で自由な保育の可能性について検討を行った。同時に、週案や保育記録の記録方法についても調査研究を行った。



図1 粘土場

4. 研究成果

(1) 遊びの実践からの成果

① アフォーダンス理論に着目した実践

平成23～25の3年間の粘土遊びの研究に続いて、平成26年からの3年間は、粘土以外の素材や粘土とそれらの組み合わせによって構成された環境から得られるアフォーダンスから生まれる遊びを調査した。例えば、粘土遊び前後の「粘土で作りたいもの」の描画では、前者が並列的で短時間であるのに対して、後者は、連続したイメージによる重なりのある描画が増え長時間集中する子供が多かった。ダンボールの家づくりを粘土場で行った場合、さらに遊びの時間は継続する傾向が見られた。またハンディタイプの顕微鏡や上皿天秤などを遊びに取り入れた実践を行い、「もの」が子供の遊びを引き出すことを調査した。結果として、言葉や表現につながる成果を得た。

② 場の保育の実践

レッジョ・エミリア・アプローチ幼児教育研究者には広く知られるようになったが、前回の調査では現場での認知度は、2.5%に止まった。そこで「場の保育」として、場から「こと」を生み出す遊びの調査を行なった。一般に行われているコーナー保育は、各コーナーでの設定的な意図のある保育であった。本実践では、子供達が場のアフォーダンスから自由に主体的な遊びのテーマ(想像・技術・伝達)を引き出すことができることを確認した。例として「ブロック場」や「材木場」が挙げられる。自然木を切ったものや角材、板材などを準備して場を構成すると、音楽的な遊びやなどが引き出されることが観察できた。

③ 保育者の研修のための実践

研究当初から保育者の意識調査のために「ノート」という記録帳を各自2冊準備し、1冊ずつを研究者と交換しながら、日々の観察や疑問点等を記録した。これを元に園内研修を重ね、保育記録や個人の遊びに対する援助の方法について共通理解を図ることができた。高梁中央保育園での継続的な調査では、当初は前年度の方法がベースになっていたが、3年間で子供達の遊びを援助する方法に興味関心が湧いてきたことが現れた。

(2) 生態教育学による分析方法

生態心理学の研究者である野中哲士との研究協力から進めて、幼児の遊びの始まりと終わり、遊びの中での「ふるまい」の分析方法を開発できた。例えば、粘土遊びに柔らかい粘土と白く固まった粘土を準備したり、さらに固まった粘土にスリコギを準備してみたりすることで、そこから得られる意味や価値が子供の遊びに新たなイメージを与えることが分かった。粘土の可塑性は、他の素材には少なく、幼児の遊びに試行錯誤を可能にすることも明らかとなっている。絵画表現との比較を行いながら、動くイメージの検証を行うことができた。今後はさらに詳細な粘土の可塑性に着目した調査を準備している。

(3) 粘土場環境比較

「軒先粘土場」(図2)においては、園庭で手軽に大量の粘土で遊ぶことのできる環境が構成できた。基本的には、木製テーブルの上で遊ぶが、園庭の中央付近でままごとなどをすることもできる。砂場の砂と混ぜたり、硬くなった粘土の粉と混ぜたりして遊ぶこともできる。異年齢の子と一緒に遊ぶことができる。さらに砂場やそこで使用する道具との連動、植物など自然物の遊びへの取り入れ方、光や風を感じることで、その他室内と比較できる環境要素を調査できた。また「軒先粘土場」は、室内での設置という一般園では難しかった課題を、解決できる設備であることが確認できた。



図2 軒先粘土場

(4) 保育現場の調査と実践的広がり

自由な遊びを行なっている園の視察により、「設定と自由」「型と発展」に関する知見が得られた。ことに鹿児島大学附属幼稚園での豊田英雄から始まる子供主体の保育の歴史は重要な資料となった。高梁中央保育園や研究協力園での粘土遊びの実践データを元に、現在、岡山大学附属幼稚園からの要請で同園内に粘土場が実現しようとしており、岡山県全体への「場の保育(自由な遊び)」の広報的成果がインパクトとして実りつつある。またブログによる広報等、ICT利用による情報交換や提供も可能となっている。

(5) 保育記録とドキュメンテーション

レッジョの特徴であるドキュメンテーションは、先進的な保育を行なっている園で様々な展示方法を見ることができる。しかし忙しいと感じている保育者に、十分な研修時間を設けるのは極めて困難であることが調査から明らかになった。そこで保育者同士の共通理解のツールとしたのが、中央ホールに置かれた27インチのデスクトップパソコンによる写真の連続再生装置である。園内研修に替る共通理解のための方法となった。結果として各保育者が撮影する記録写真が増加した。また映像記録を媒介した打ち合わせや年齢別クラスを超えた共通理解が可能となった。現在、陽だまりの丘保育園の協力により、高梁中央保育園での保育記録の方法に新たな取り組みが始まっている。

(6) 保護者との連携とデジタル機器利用

園内での記録にデジタルカメラ等を利用してきた。保護者との遊びの情報の共有のためにPCを使用することで、会話が増え子供の環境や生活についての共通理解に資することができることが明らかになってきた。しかし重要なことは、映像記録を見て情報交換することにとどまらず、遊びの中に次の遊びを予見し、保護者と一緒に遊びの援助に関する対話が生まれることであることが分かってきた。

(7) 生態教育学の構築

① 生態教育学の視座による結論

(もの) 造形環境によって引き出される動くイメージは、主体的な活動を連続して生み出す。

(こと) 今までの園の環境にレッジョの視点を加えることで、幼児の遊びへの主体的な意欲が高まる。

(ひと) 造形遊びを分類し詳細な準備をすることで、造形プロジェクトの自由な発想を援助できる。

② 就学前教育の意味の再確認
設定的一斉保育を「一人一人に適当な保育」へと転換するためには、よりよく準備された環境が必要である。これが設定的であるか否かは、その保育理念と援助方法による。生態心理学での先行研究によると、環境から与えられる意味と価値は、受け取る側の態度による。E. リードが述べている「経験の経験」こそが、新指導要領の「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を育てると仮定して研究を進める準備が整った。就学前教育では教科教育を行なってはならない理由を解明する。

③ 場の保育の展開

平成29年度には、第68回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会（岡山大会）が開催予定であり、これに向けて平成27年度から研究発表園である岡山市立鹿田幼稚園と共同で「場の保育」の研究を行ってきた。他にゆうき幼稚園、三好桃山幼稚園に充実した粘土場が採用された成果が挙げられる。本年度から再び粘土素材に関する研究に焦点を当てて細部に関する研究と広い広報を行う準備ができています。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計4件）

- ① 前嶋 英輝「幼児のための粘土遊び設備の構築」吉備国際大学研究紀要（人文・社会科学系）増刊号 2017
<https://kiui.repo.nii.ac.jp/>
- ② 前嶋 英輝「粘土場の土の粘土遊び」美
育文化ポケット第12号 22-23 2016
- ③ 前嶋 英輝「幼児のない触覚性と生態教育
学の可能性」美術教育第77巻第9号
34-37 2016
- ④ 前嶋 英輝「幼児のための粘土遊び設備
の構築」吉備国際大学研究紀要（人文・
社会科学系）第26号 13-39 2016
<https://kiui.repo.nii.ac.jp/>

〔学会発表〕（計6件）

- ① 前嶋 英輝「粘土場と造形遊びの生態教育
学」日本美術教育学会第65回学術研究大
会滋賀大会 2016.8.10「コラボしが 21
（滋賀県・大津市）」
- ② 前嶋 英輝「幼児の粘土遊び環境と生態教
育学」日本保育学会第69回大会
2016.5.7「東京学芸大学（東京都・小金
井市）」

- ③ 前嶋 英輝「レヅジョ・エミリアと日本の
生態造形教育学的環境」日本乳幼児教育
学会第25回大会 2015.11.28「昭和女子
大学（東京都・世田谷区）」
- ④ 前嶋 英輝「粘土場と朝の園庭環境による
場の保育」日本美術教育学会第64回学術
研究大会兵庫大会 2015.8.10「MOA美術
館（静岡県・熱海市）」
- ⑤ 前嶋 英輝、土屋 勇氣「粘土場と造形コ
ーナー遊びの環境」日本保育学会第68回
大会 2015.5.9「椋山女学園大学（愛知
県・名古屋市）」
- ⑥ 前嶋 英輝「0～6歳児の粘土場環境での
ふるまい」日本美術教育学会第63回学術
研究大会兵庫大会 2014.8.7「関西国際
大学（兵庫県・尼崎市）」

〔その他〕

ブログ：「芸術による教育」
<http://sculturo.exblog.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前嶋 英輝 (MAESHIMA, Hideki)
吉備国際大学・アニメーション文化学部・
准教授
研究者番号： 50291878

(2) 研究協力者

安原幹人 (YASUHARA, Mikito)
田尾 瞳 (TAO, Hitomi)
原田利枝 (HARADA, Toshie)
渡辺祥子 (WATANABE, Yoshiko)
曾木書代 (SOGI, Hisayo)
藤森平司 (FUJIMORI, Heiji)
坂本行正 (SAKAMOTO, Yukimasa)
鈴木眞尋 (SUZUKI, Mahiro)
野中哲士 (NONAKA, Tetsushi)
徳 雅美 (TOKU, Masami)
Paola Cavazzoni